

地域情報（県別）

【福井】全国6カ所目、北陸初の被ばく医療専門施設が開設-小淵岳恒・福井大学高度被ばく医療支援センター長に聞く◆Vol.1

専門人材育成や被ばく患者への高度医療を提供

2025年11月26日(水)配信 m3.com地域版

2025年9月9日、福井大学医学部附属病院（福井県吉田郡永平寺町）に全国で6カ所目、北陸地方では初となる「高度被ばく医療支援センター」が開設された。東日本大震災の教訓を受けて国が設置を進める事業の一つであり、高度被ばく医療の拠点となる施設は全国最多15基の原子力発電所が立地する福井県において、「待望」だったという。同センターでは専門人材の育成や被ばく患者に高度医療を提供する役割を担う。小淵岳恒センター長に、開設の経緯と施設の特徴を聞いた。（2025年10月21日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら



小淵岳恒氏

——福井大学は2023年、原子力規制委員会から国内6カ所目、北陸地方では初となる「高度被ばく医療支援センター」に指定されました。指定に向けた動きの端緒をお聞かせください。

2011年に起きた東日本大震災がきっかけです。巨大地震によって大津波が発生し、さらに原子力発電所で深刻な事故が起きるという「複合災害」の教訓を踏まえ、国は原子力規制委員会を中心に原子力災害時の医療体制の強化を図りました。その一環として2015年に、被ばく医療の研究や実績があった施設を中心に、弘前大学、福島県立医科大学、放射線医学総合研究所（現：量子科学技術研究開発機構）、広島大学、長崎大学の5施設が「高度被ばく医療支援センター」に指定されました。

福井県には廃炉中を含む全国最多の15基の原発が立地しているものの、北陸地方は高度な被ばく医療を行う専門施設がなく、その開設が待たれていました。他のセンターの負担軽減を図りつつ、県内の原発にトラブルが起きた際にすぐ対応できるよう、人材の調整など指定に向けた準備を進めてきました。

被ばく度や放射性物質の種類・量を測定できる装置を保有

——指定を受けた後、原子力規制庁からの補助金の交付が決まり、2025年9月に専用の施設が学内に建設されました。

国の補助金約17億4000万円を活用して建物を整備し、専用の装置を導入しました。2024年に着工して2025年9月9日に開設したセンターは鉄骨3階建て、延べ床面積2028平方メートルで、検査室や除染室、処置室などを備え、3階には収容人数約80人の研修用ホールを備えます。

施設の一番の特徴は、被ばく医療に対応できる人材を育成することです。続いて、2種類の検査装置も挙げられます。一つは、被ばくの度合いを詳細に調べられるもの。1999年に茨城県で起きた東海村JCO臨界事故のように、一度

に多量の放射線を浴びてしまった場合は細胞のDNAが損傷するため、高度な顕微鏡を用いて染色体を分析し、被ばく度合いを測定することが必要です。

もう一つが、体内に取り込まれた放射性物質の種類と放射能量を体の外から測定する大型の機器「ホールボディカウンター」です。当センターではこれを2台保有しています。一つは簡易測定型で、避難住民などに対して放射性物質を取り込んでいないか5分ほどで調べ、多くの人を検査していきます。もう一つはより詳しく、体のどの部分にどれほどの放射性物質があるかを調べます。いずれの装置も県内で保有する施設は当センターのみです。



福井大学高度被ばく医療支援センターの外観

原子力災害医療研修には全国から参加者

——平時は人材の育成を図り、有事は原子力災害拠点病院では対応できない専門的な治療を要する被ばく患者を受け入れたり、専門家を被災地に派遣したりする役割を担うといいます。

平時は何より育成が重要であり、当センターではまず院内の人材育成に取り組んでいます。DMAT隊員など災害医療に携わっている人は被ばく医療を兼務していることが多く、被ばく医療のみを行っている人はほとんどいない印象です。福井県で大地震などが起きればDMAT隊員が出動しますが、東日本大震災のように地震後に原発にトラブルが起きた場合、「どの病院にも被ばく医療を担える人がいない」といった状況が起こります。そこで、原発のトラブルに対応できる人材が必要なのです。

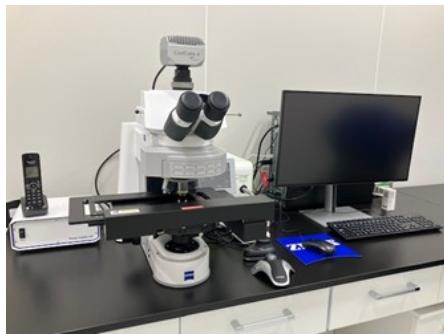
——同センターでは外部に向けた研修も行っています。現在の人員体制も合わせてお聞かせください。

現在の人員は6人で、内訳は医師が1人、看護師が2人、診療放射線技師が1人、事務員が2人です。このほか、センターで催し物や勉強会、事故発生時などの有事に手伝ってくれる医療従事者は30人弱います。

外部に向けた原子力災害医療の「中核人材研修」は、原発立地県またはその隣接県の医療従事者を対象としており、他のセンターと同じ教材を用いて講義と実習を行っています。当センターでは10月上旬に2日間のコースを初めて実施し、全国から21人が参加しました。今後は年に2回の頻度で行う予定です。

——同センターが開設されてまだ1ヶ月弱ですが、運営上の手応えはありますか。

予想以上に院内研修の受講希望が多かったのは収穫でした。院内研修としては、(1) 防護服の着替え、(2) 被ばく傷病者の治療と除染の方法、(3) 部屋の養生、(4) 検査装置の使い方——の4つを主に行いましたが、テーマによっては定員約10人の倍となる20人ほどの希望がありました。AEDの研修などと同じように、被ばく医療も経験値が0と1では全く異なります。1回でも経験しておくと数年後トラブルがあった時に「そういえば……」と記憶が蘇り、体が動くもの。受講希望の多さに、原発が多い「まさに福井に生きる人だ」と共同体意識のようなものを感じられ、うれしかったですね。



被ばく度合いを測定できる染色体解析システム



放射性物質の種類と放射能量を測定できるホールボディカウンター

◆小淵 岳恒（こぶち・たけつね）氏

2000年福井医科大学卒。同大学部附属病院第2外科、長浜赤十字病院外科を経て、福井大学医学部附属病院救急総合診療部で救急医療と総合診療に携わる。2018年同院救急部総合診療科講師、2025年7月から福井大学高度被ばく医療支援センター教授。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太（写真は同センター提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

